

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

日本を紹介している本の紹介(2) 杉本良夫、ロス・マオア『日本人論の方程式』(東洋経済新報社 1982年2月 第一刷 / ちくま学芸文庫 1995年1月 第一刷)

著者	江村 裕文
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化
巻	11
ページ	5-7
発行年	2010-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/5142

日本を紹介している本の紹介 2

杉本良夫、ロス・マオア『日本人論の方程式』

東洋経済新報社 1982年2月 第一刷

ちくま学芸文庫 1995年1月 第一刷

江村裕文

一般に、「日本人は日本的である」といわれる。しかし、本書は、なぜ、何故に、何をもって、「日本人は日本的である」ということができるのかを問うている。

「日本人は日本的か?——この問題はやさしそうに見えて、なかなかむずかしい。アメリカ人はアメリカ的だ、オーストラリア人はオーストラリア的だ、などというとき、私たちは一体どういう映像を心に浮かべているのだろうか。それぞれの社会の特色を描写する作業は、どういう手続きを経て完結すべきなのだろうか。」というのが、第一章の冒頭のことばである。

著者の一人、杉本氏は、日本生まれで、日本の大学を卒業後新聞記者として働き、その後アメリカの大学院で6年を過ごした後、オーストラリアの大学で教職に就いている。もう一人のマオア氏は、アメリカで生まれ育ち、アメリカの大学で学び、商務省で働いた後来日し、日本の大学や研究機関で7年間研究生生活を送った後、オーストラリアの大学の教壇に立っている。兩人ともに、成人以来、日本・アメリカ・オーストラリアで過ごしたことになる。

よくある比較が、たとえば自国とある外国という二国だったりする

のに対し、本書の二人の著者はともに日本とアメリカとオーストラリアという「三点測量」のような視点で、日本に対して視線を投げかけているという点に、本書の特徴というか存在意義が認められると思う。

まず彼らは、1970年代以降、量産された「日本人論」と呼ばれる文献群を問題にする。そしてそれらが、日本人がどんなに特殊独特であるかを強調するという点で似かよっていると指摘する。その中身は、「同質同調論」であり、日本人のどの個人、どの集団、どの関係を取り出しても、全体に共通なパターンが普遍的に存在しているというものである。これは、日本社会の中の個人が手にいれる、収入、権力、情報、ステータスなどの報酬には、職業、年齢、性別、居住地、企業規模、教育程度などによって格差があると考える「分散対立論」の可能性を最初から排除している。

彼らは、実証的に「同質同調論」を検証すべく、以下に挙げる4点の日本人論を「計量的内容分析」の対象とする。

- 1 中根千枝著『タテ社会の人間関係』講談社
- 2 土居健郎著『「甘え」の構造』弘文堂
- 3 エズラ・ヴォーゲル著『ジャパン・アズ・ナンバーワン』
ハーヴァード大学出版会
- 4 エドウィン・ライシャワー著『ザ・ジャパニーズ』
ハーヴァード大学出版会

彼らが具体的に問題とするのは、これらの著書に見られる「叙述命題」「因果命題」「定義命題」「方法論命題」の内訳である。

分析結果の一例をあげると、

「第一に、四著に提示された命題の大部分は、証拠やデータによって裏づけられることなく書き並べられている。このことは、因果関係や相関関係を示す理論的命題に関して、とくに顕著である。」

というものがある。

「日本人は・・・である」とか「日本社会が・・・であるのは、・・・という理由による」といった命題を提示するにあたって、その根拠が示されてないという指摘である。

これらを含めて、「日本人論」の全般的な方法論における問題点が指摘される。この部分を読むだけでも、これまでのいわゆる「日本人論」が主張する内容に関して、疑念を抱かせるに充分であろう。

彼らは、さらに「多元的階層モデル」を提示し、「日本人論」に関する新しいパラダイムを提案し、最後に「「日本人」という範疇は誰のものか」というタイトルの「日本とは何か」「日本人とは何か」という最初の問題に立ち返る議論でこの著書を締めくくっている。

本書も、以前何年かにわたって外国人留学生の読解教材として利用したことがある。

本書は、その中で批判されているような、「日本とは・・・である」とか「日本人は・・・である」と明確に書いてあるような「日本人論」とは異なり、論証の手続きが手堅く、論の積み重ねが厳密であるために、ある種のとっつきにくさを感じさせるようであったが、それだけに、読み終わった段階では、日本なり日本人について議論する際に、本書を経験してない留学生と比較して、より議論の仕方および内容が慎重であったという印象がある。

何冊かの「日本人論」を読破してから本書を読むと、それらを様々な「日本人論」の中で相互に位置付けるのに役立つであろう。